

# 祈りとしての絵画

バーバラ・キャスターライン

訳：江田早苗(文)、兼松 悟(俳句、短歌)

## 概要：

私たちは、神に捧げるために絵を描き、詩を詠みます。痛みや犠牲は、神への愛を浄化させ、変わりゆく生への情愛を深め、私たちの芸術作品への理解をより深めてくれます。祈りや瞑想は私たちの心を開き、抽象的な概念をより具体的なイメージで表現するのを助けてくれます。

## はじめに：

今日の私の発表を、正岡子規に捧げたいと思います。正岡子規は、ちょうど 101 年前の今週、つまり 1902 年 9 月 19 日になくなりました。生没前の幾年かを、子規は肺炎と脊椎カリエスの痛みに耐えながら病床に伏せて過ごしました。それにもかかわらず、彼はその偉大な信念と奉仕の精神をもって、俳句、短歌の方面において日本の文壇を活性化させるために努力したのです。「愛することは、犠牲になること」と、アブドル・バハも教えておられます。

正岡子規の書いた詩の中で、私が特に気に入っている次の詩から、子規の豊かな感受性を伺うことができます。(英訳：Goldstein 及び篠田)(1)

Shut in my room to avoid the cold	冬ごもり
I was drinking tea	茶を飲みおれば
when that single rose	生けておきし
in a vase	一輪バラの
fell, scattering the petals	花散りにけり

この水彩画のスケッチは、子規が見たであろうその色あせたバラが、その花びらを落としてしまう直前の様子を描いたものですが、私はこの絵を子規に捧げたいと思います。

From his bed of pain	臥せる子規
the immortal Shiki saw	愛でたるバラの
and loved a flower	くずれけり

## 「与える」とは？：

この世界の、私たちの周りに、そして私たちの心の中に存在する全てのものは、みな神から与えられた贈り物です。ということは、私たちがこの世で行う全ての<sup>いと</sup>営みは、全て神様から頂いた贈り物に対するお礼と考えることができます。

God sends us flowers	授かりし
and we put them in a vase	花を神への
	くげ
and offer them back	供花とせり

私たちが与えるもの 愛において、仕事において、奉仕において は、私たちの浅はかな俗欲よりもっと深いところから生まれるものでなければなりません。それは、全てのものに命を吹き込む<sup>くげんか</sup>深遠なる大河であり、その力は私たちを通して具現化されるのです。ショーギ・エフェンディは、「我々は、全ての水を常に惜しみなく与えながら、目に見えぬ源から絶え間なく水があふれ出くる噴

水や泉のようであればならない。」(2)と教えました。アブドル・バハは、「疑いもなく神は、彼以外  
えいち

のあらゆるものから超絶した者には誰であれ靈感を与え、そしてその者の心より叡知と言葉の純粋な水を噴き出させ、豊かに流れ出させ給うであろう。」(3)と教えておられます。次の詩と、名古屋の鶴舞公園の噴水の絵は、この教えを表現したものです。

The fountain splashing	深きより
pouring gushing giving –	湧 <sup>い</sup> き出で泉
connected to the Source	ほとばしる

### 抽象的な概念から具体的なイメージへ：

絵画と短歌の題材を探すため、私はよく散歩したり周りを見回したりします。時には、祈り、瞑想し、「私が身の回りを見る事象の意味はなんだろう」と黙想にふけたりもします。

例えば、名古屋の平和公園に行くと、公園からでてくる狭いあぜ道があります。最初に目に入るのは、小さな小屋の立っているあまり手入れのされていない野菜畑、低木の茂みと木立ち、小川と湿地などでしょう。しかし、その向こうのほうに、満開の桜が見えた気がて、そのあぜ道を歩いていくと、思いがけず美しい草原に行き当たったのです。このあぜ道と私の見た木は、神の導きを象徴していると考えることができます。「アーマドへの書簡」の中で、バハオラは「望む者には、神へ通ずる道を選ばせるべし」と言っています。そして、サドラトゥル・ムンタハ、「小道の果ての木立ち」は、神の顕示者によって与えられた導きと、更には神御自身による導きを表しています。そこで、一句：

At the far end	折れ曲がる
of this winding path	細き道行けば
I glimpse a tree	その奥に
its glowing flowers	花咲く一樹
beckoning, guiding me	われを誘う
towards what I can't yet see	

物理的現象を心の目で観察すればするほど、精神的な世界こそが本当の「現実」なのだということが分かります。「世の中を知り尽くした」と言いたげな得意顔の小さな虫を見つけて、私はちょっと驚きました。

Little bug, don't you know	公園の
this is just a city park	外の世知らぬ
-- not the real world	小さき虫

私も、日常の忙しさに、つい私の本当にいるべきところを忘れてしまうことがあります。「落穂集」の中で、バハオラは「この世とは劇のようなものである。それは空虚で空しく、現実のように見える無に過ぎない」(4)と教えておられます。

次の風鈴の絵と詩は、全ての物事がどんなに深く影響を与え合っているかという考えを表現しようと試みたものです。

Paper scrap flutters	鈴鳴れば
tiny bell tinkles "chin, chin"	切り紙ゆるる
they're tied by one string	糸の先

アブドル・バハは「動力なくして動きはなく、原因なくして結果は存在し得ない」とおっしゃいました。

また、「事象の実在性に内在する本質的特性と必要不可欠な関係」(5)についても話しておられます。絵を描き詩を詠むことにより、この抽象的な概念がより即実的で、身近なものとなるのです。タヘレの詩を翻訳したジョン・ハッチャー氏とアムロラ・ハマト氏は、芸術とは「プラトーが“概念”と呼んだところの、目には見えない世界に、何らかの感性的に捉えることのできる形を与えようと試みることだ」(6)と言っています。物事がかかわりあって存在している、という考えは概念的な世界に属するものですが、風に吹かれて鈴を鳴らしている切り紙は、彼らの言う「感性的に捉えることのできる形」ではないでしょうか。

### 神の賛美としての絵画：

絵画は神が私たちに与えてくれた素晴らしい世界に感謝の気持ちを表すための手段です。私たちの目には見えない神の容貌の美しさは、この物理現象としての世界に反映されています。私たちは、小さな花の完璧なまでの美しさによって神の優しさを、山々の壮大さによって神の威厳を知ることができます。

次の絵と詩の根底に流れる「概念」は、何年もの間私の心の中に存在したのですが、神に祈りを捧げた後でようやく言葉で表現することができました。とてもシンプルなものですが、

Hydrangea petals  
the varied blues of heaven  
encapsulates

天空の  
青をたたへて  
額の花

アブドル・バハは、次のように教えておられます。「万物の最も内なる本質と、各々の持つ個性について考えるとき、神の創造したあらゆる物に内在する神の御慈悲の証に気づき、万事現象を光のごとく覆う神の諸々の御名とその属性を見るであろう。(中略)更に、汝はその目でみるであろう。宇宙は、神の隠された秘密を解き明かしてゆく絵巻物であることを。(中略)そして、存在する全ての原子の一片たりとも、全ての創造物の中の一命たりとも例外なく、神を賞讃し、神の属性と御名を口にし、彼の栄光を表し、彼の唯一性と御慈悲へと我々を導くのである。」(7)

### 全ての芸術は不完全である：

芸術家には、謙虚な心が必要です。私たちがどんなに努力しても、何年練習しても、私たちの作品は色あせた、現実の模倣であり、私たちが達成しようとしている目標には手が届きません。しかし、それだから諦めたほうがいい、というわけではありません。努力するということ、それ自体が大切なのです。

鈴木大拙(本名:鈴木貞太郎)は、「禅と日本美術」についてのエッセイの中で「掠れた線やある物体の不完全な模型は、規則的で完璧な形を持つ何かの存在を示唆している。しかし、禅の観点から、そして日本的な感覚から見れば、形がゆがんでいるものも、そのゆがんだ形ゆえに完全であり芸術的であると考えられるのである。ここで、完璧でないものを完璧であるとするために必要なのは、その物体に対する芸術家の精神的愛、つまり、偉大な魂から生まれる、自己主義を超えた愛である。」(8)と述べています。

ここにあるのは、私好きな物の、シンプルで不完全な絵です。コレウス、それからキャベツ、ただのキャベツですよ。

アブドル・バハは、次のように言っておられます。「バハイ信教では芸術、科学、そしてあらゆる技術は礼拝であると考えられている。一枚の書簡用紙を作るにも、作る人が全能力をつくし、良心的に、しかもそれを完全なものとするために全力を集中しているならば、彼は、取りも直さず、神を讃美しているのである。」(9)

日本では、幸いなことに和紙を漉くことは芸術の一つとみなされています。

This hand-made washi

色さびて

rough and soft and creamy-beige 絵筆によろし  
perfect to paint on

てすき  
手漉和紙

はかな

儂さ:

俳句は、一瞬の時を捉えるものです。蛙が飛び込む水の音・・それは、それに続く永遠の静けさと対照を成すものです。俳句にはいつも生の儂さが暗示されています。ブンブン飛んでいるこの蠅は、二日生きるかもしれません。この満開の桜の花は、一週間咲いているかもしれません。そして、私は・・私の人生も、刻一刻と終わりへと近づいているのです。次にご紹介する、過ぎ行く時間についての詩は、ある日とうとう眠りにつきかけたとき思いついたものです。

Petals drifting  
down the stream  
  
carry the season away

いかだ  
花筏  
流れて春の  
ゆ  
行きにけり

バハオラは次のように言っておられます。「夜は昼に続き、昼は夜に続いた。そして汝等の生命の時は来、そして去ったが、汝等のうち誰も一瞬間でさえ、滅びるものより自らを超脱させる事に同意する者はいなかった。まだ汝等に残されている短い瞬間が浪費され失われぬ様に奮気せよ。電光のように素早く、汝等の時代は過ぎ去るであろう。そして汝等の身体はちりの天蓋の下に安置されて

かんすい

しまうであろう。そうなった時、汝等は何を完遂し得るであろうか？汝等の過去の失敗をいかにして償い得るであろうか？」

(10)

秋と冬の詩は、全てこの儂さというテーマに触れています。ここに、一句ご紹介します：

Winter water reeds  
beautiful in their own way;  
I don't mind the years

枯れ葦や  
老いを忘れて  
美しく

私たちは、人生のそれぞれの段階で学んだことに自分なりに意義を見出さなければなりません。私も、まだ発展途上人でありたいと思っています。そして、物事を新しい目で見たいと思っています。次の詩は、春には見られない一景です。

Across the wall spread vines  
like lines  
of music  
those few remaining leaves  
the notes

塀越えて  
宙へと上る  
枯れ蔓に  
音符の如く  
葉の残りをり

人生のリズムとは、音符と休符、言葉と沈黙、そこにある物とない物。そして、吐く息と吸う息、昼と夜、夏と冬、生と死。

どうして私たちは骨や骸骨を見て不安になるのでしょうか？もしかすると、自分の命の終わりを考えさせられるからかもしれません。聖書にもバハイの聖なる書にも、「骸骨に肉体を着せる」という表現が精神的な再生を指す比喩として使われています。アブドル・バハは、西洋諸国を訪問することによ

り「まるで骸骨に肉体を着せる様に、バハイ教の信者の魂と精神に息を吹き込んだ」(12)とっておられます。私は川の中に浮かぶ無人の島の水辺でこの魚の骨を見つけ、ふと止まって考えました。

As fish bone am I	うお 骨の魚	
scoured bare to be one day		復活の日を
by spirit re clothed	疑はず	

次こざくらの古桜を扱った詩(と絵)も、キリストの復活をテーマにしたものです：

This old cherry's trunk	枝折れて	
nearly rotted through		なお花咲ける
its branches broken off, but one	老桜	
Yet this spring again		われにも春よ
puts forth its blossoms, fresh.		またもどりこよ
So may I too.		

幸いなことに、我々が経験する人生の試練は、それがどんなに困難であっても精神的な成長につながります。この最後の短歌は、そのイメージも意味も、昨年つらい経験をしたある日の夜、夢の中で思いついたものです。

Catching rain's bounty	雨の打つ	
earth at first just turns to mud;	土より花の	
later the flowers.	生ふること	
Asthma, muddled thoughts tonight;	今宵の憂い	
tomorrow, though, I can paint	明日の絵の糧	

アブドル・バハは「身体的病に苦しむとき、人は創造の神へと近づき、その心からは世俗的な欲望が消え、苦しむものに対する優しさと同情心、そして全ての生き物に対する慈愛の気持ちで満たされる。身体的な病は人間を一時的に苦しめるが、彼らの魂には影響を与えない。いや、むしろ苦しみは偉大な目的に貢献するのである。なぜなら、苦しみによって彼の心の中には精神的な感受性が創りだされるのだから。」(12)とっておられます。

私たち皆の「精神的な感受性」が豊かになり、生活においても、芸術においても果実を实らせることが出来ますように。皆さん、ご清聴ありがとうございました。



